

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財)第五福竜丸平和協会
〒136 東京都江東区
夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-3521-8494

人間に相応しい理性をもった人ならば、誰でも核戦争ほど馬鹿々々しいものはないと判断するであろう。核戦争は人類を破滅させる。その準備の核実験ですら、人々の基本的な権利を犯す。久保山さんは何も悪いことはしていません。行動に不注意もなかった。正当に仕事に励んでいただけである。人知の及ばない天災にあっただけでもない。それなのに、死ななければならなかった。誰かが間違っていたからである。その間違いの解明なくしては核の廃絶はあり得ない。

過去の戦争の歴史を辿れば、核兵器の開発は論理的必然性をもつ。強力な兵器をもつことは国際社会において強力な発言権を行使できるからである。また他の国から自国を守るためには、他国と同等またはそれ以上の性能をもつ兵器をもつことが要求される。しかし、科学技術の発達は社会構造の変革また戦争のルールの変革を要求せざるを得ない。国際的に、それが破られる可能

核の廃絶について思う

半 谷 高 久

性をはらんでいても、戦争のルールが存在してきたことは、人間の理性を信じてよい証拠と私は考える。核戦争の愚かさを理解する理性の力は日々進歩するであろう。

それが私が核の廃絶が可能であると信じる根拠である。核戦争を無くすために、別段人間がより一層聖人君子に近づく必要はない。余談になるが私は人間がもつ聖人君子の程度は昔から現代に至る時代を通じて余り変化はないと考えている。

核拡散防止条約は新しい戦争のルールをつくる第一歩として私は評価する。しかし、手放しでは喜べない。というのは、これは既存の核保有国が非核保有国を軍事的に永久に支配する危険があるからである。前者の国が後者の国に比べ、より理性的であるという保証はどこにもない。核に守られた非理性が真の理性を抑圧する可能性を否定できない。核拡散防止条約制定の本来の目的を基礎にすれば、核保有国が非核

保有国の核査察をする権利があるならば、逆に非核保有国が中心になって、核保有国の核査察をする権利があるのではないかと、それが真の国際的平等ではないか？

新聞報道によれば、西欧諸国では日本の憲法を改正してPKFへの参加を求める声が強いている。また日本でもそれに賛成する意見がある。私はその声が生まれる理由がそれなりに理解できる。というのは、日本は平和憲法をより所にして、軍事支出を抑え、著しい経済発展を成し遂げた。しかし、平和憲法を基礎に、国際平和にどれだけの自らの犠牲を払ったのだろうか？ 経済大国としての日本の努力不足は誰の目にも明らかである。その怠慢への批判がPKF参加への圧力となったと私は解釈する。

以上、国際問題には井戸の中の蛙でしかない私の戯言だが、核拡散防止条約の理念を足掛かりにして、核を排除した新しい戦争ルールの確立に日本が先頭に立てないものだろうか。それが平和憲法を守る最も具体的な道ではないか？ 日本には平和憲法があるのだ叫んでも、他国にとって、それは哲学無き単なるエゴイズムとしか映らないのではないか？

(都立大学名誉教授)



船の下で福竜丸の物語を聞く

展示館に春の風、船を全員でスケッチする中学校も

ユーカーの森に彩りを添えるかのように、小さな黄色の花をいっぱいつけていたミモザが「アカシアの雨」のように降ると夢の島公園も春本番。

春休みと共に展示館は小さなグループの見学が圧倒的に多くなり、家族連れや華やいた声でにぎわいます。学童クラブ、親子読書の会、病院の看護婦さんの見学会や、バスガイドさんの見学会や、奈川県の生協のお母さんたち、北区明るい社会を作る会、四街道市未来に生きる平和を考える会など

熱心な見学会が続きます。その中で、三月三十一日、世田谷区の「ともだち文庫」の子どもたちの「卒業と入学を祝う会」が展示館で行われ、三十名近くの子どもたちが、船と共に楽しいひとときをすごしました。船の船先近くに、机ひとつの即席の舞台が作られ、周囲ぐるりと丸椅子や、床にべったり座った子どもたちに、紙芝居「とびうおのぼうや」や「うきです」や、絵本「わすなひ」の朗読がお母さんや民話の会の中村博さんによって演じられました。「死の灰は、はらはらとここに降ってきました。」中村さんの話にみんな思わず首をすくめます。色あざやかな大漁旗の前に、民話の語りが行われ、語り部の川島保徳さんの身振り手振りの巧みなお話を身を乗り出すように聴き、はしゃぎ、手をたたき、笑い、と館内にひととき春の風がそよひだり、雰囲気でした。

学校の見学も多く、三月五日、世田谷区の調布高校の女子生徒二十人が「日本史の校外授業」で来館、船内の甲板を教室に、大石又七さんを囲んで体験を聞き「またとない授業」を行いました。立川



静岡の青年として

市立立川第七中学校二年生二〇名は、広島への修学旅行の事前学習として来館、「しっかりと心に船を焼き付ける」と全員が館内一杯に散って、思い思いの角度から画用紙に船をスケッチ、「広島では原爆ドームを描く」とこれは新鮮な見学会でした。

田中邦高

私たちが静岡県青年団連絡協議会では、長年にわたり、3・1ピキニの時に、平和集会を独自に開催し、核兵器廃絶を訴え、静岡県の青年として郷土を見つめ直し、平和を愛してきました。

今年、例年の研修会とは変わった試みとして、実物の第五福竜丸を見ること、大石又七さんのお話を聞くことにより、核の恐ろしさ、平和の尊さを考える機会として、二十七名の青年が東京で研修をいたしました。

静岡は、長崎・広島につづく第三の被爆県として、青年団内でも青年交

流や研修会などに参加してきました。今回の企画は、「ピースフォーラム93」として、第五福竜丸展示館を見学、大石又七さんの講演、ビデオ上映、ディスカッションなどを通じ、事実を知ること、それをどう伝えていくかが目的でした。参加者の反応は、「自分の近くでこんなひどいことが起こっていたなんてまったく知らなかった。もっと多くの人に伝えていかなくては。」など、多くの青年が事実を伝えることを決意しました。

大石又七さんの講演では、大石さんの地元である吉田町の青年が参加しており、「父が3・1の日にはピキニの近くで漁をしていた」という声もあって、身近な問題として感じたという青年が多かったようです。

静岡県の青年として、いつまでも核兵器のない平和な地域に住むことを誓い合い、東京を後にしました。

(静岡県青年団連絡協議会副会長)

平和教育で平和な世界を 創造できるか④

藤 田 秀 雄

前記のように、現在、平和の定義は、かつてのものより広範になっている。平和は、本来、人間のもっている可能性を、はばまらない状態であるともいわれている。人間の可能性をはばむ最大のものは、戦争であるが、人権抑圧も、貧困も、自然破壊も、人の可能性を奪い、阻害する。

したがって、いま、世界でおこなわれている、平和教育の幅も、非常に広い。平和教育研究の国際組織(国際平和研究学会・平和教育コミッション)の中心になっている、スウェーデンのA・ビエルステッド氏の昨年夏の調査報告によれば、世界の平和教育関係者があげている平和教育の目標で、多いのはつぎのようなものである。

- ・異文化間の相互理解
- ・全地球的な見通しをもつこと
- ・現実の不正や世界における不平等を見抜く力
- ・新しい展望を生み出す能力

正義とより平等な分配のために行動する準備

平和のために活動し、暴力による問題解決に反対する意欲と勇氣

この調査がおこなわれたのは、一九九一年から九二年にかけてである。したがって、東西の緊張が緩和し、第三次世界戦争(核戦争)の危険が遠のいた状態であった。しかし、かわりに、民族対立が武力紛争になって、世界各地であらだな戦争がおこってきた状況下の調査であった。また、この頃、環境問題が深刻にうけとめられ、ドイツなどで、外国人排斥運動がおこりはじめた時期でもあった。この調査結果は、こういう世界の動きを敏感に反映していると思う。

しかし、戦争こそが諸悪の根源である。戦争ほど、大規模な自然破壊をもたらすものはない。それはイラク戦争が実証している。戦争準備は、人権抑圧を必然的に生み出す。だれでもがもっている人

間性を奪わないかぎり、戦争はおこなえないものである。貧困・飢餓を生み出す最大のものも戦争である。

軍拡も貧困・経済不況を招く。その関係は、R・ディグラスが『アメリカ経済と軍拡』(ミネルヴァ書房)できらかにし、のちに世界の経済学者たちによって支持されている。五年前、国連報告は、世界の軍事費は、後発途上国の国民二六億人(世界人口の半分)の総所得に相当するとのべていた(国連レポートライン、一九八八年八月号)。いまでも、この数字は、あまり変わっていないであろう。

第五福竜丸展示館は、軍拡が大規模で深刻な環境破壊をもたらすことを実証するものである。東京圏は、米艦船の積んでいる原子炉と核弾頭の事故によって、いつ核汚染をうけるかもしれない。三千万の人は住む場所を失い、日本全体に、かつてないダメージを与える可能性があるということも、軍拡と自然破壊の問題である(J・デイビス『日本の港に停泊した軍艦における核事故』)。

平和教育でとりくむべき課題は広がっても、その中心は、あらゆ

る戦争の否定(紛争の平和的解決の追究)であり、またそのための軍縮(軍備削減にとどまらず、一切の戦力を地球上からなくし、非武装世界をつくるための行動)なにかんずく、核兵器廃絶を優先させるために、行動する人を育てる教育である。

戦争否定、戦力否定は、日本国憲法の原則である。教育基本法はこの憲法の理想を実現する教育が、日本の教育でなくてはならないと定めた(前文の冒頭)。そこで同法の前文では、「真理と平和を希求する人間の育成」を義務づけ、第一条では、「平和的な国家及び社会の形成者」を育てることを教育の目的と定めた。

憲法原則は、一九七八年の、抑止力(戦力)によって戦争をなくすことはできないという国連軍縮特別総会最終文書の内容を先取りしたものであり、教育基本法の原則は八〇年のユネスコ主催軍縮教育世界会議最終文書の内容に沿うものである。憲法・教育基本法の原則が、国際的うらづけを得たということも忘れることはできない。

(立正大学教授)
|| おわり



三崎魚市場で開かれた国際シンポジウム

魚市場で開いた国際シンポジウム

宮 越 輝 之

去る三月十二日、神奈川県三浦市の三崎魚市場で、『核兵器廃絶、3・1ビキニ被災三浦国際シンポジウム』が開かれました。三浦三崎は三十九年前、ビキニの核実験により多大な被害を受けたまちです。シンポジウムは、まさに当時大惨事となった魚市場を舞台に行われたのです。

全国十三カ所で行われ、シンポジウム、そのうちのひとつがわがまちで行われるとあって、

このまたとない機会にぜひとも成功させようと、運動は急速に盛り上がりました。その結果、これまでになく地域での支援の輪がひろがり、労働団体・民主団体はもちろんのこと、被爆を受けた順光丸や光栄丸、漁業協同組合・商店街・観光事業者団体など市内の主要な経済団体からも賛同金が寄せられました。三浦市にも後援を依頼し、資金面やPR面をはじめとめとして、多くの協力を得ることができました。こうしたなか、シンポジウム当日は、参加者目標の一七〇名をはるかに上回る二五〇名もの来場を得ました。

ビキニ被災船・第八順光丸の船長だった久岡登さんは、被災時の船上の様子を詳しく語りつつ、二度とこんな苦しみを味わわせてはならないと、核実験の根絶、核兵器の廃絶を訴えました。長崎で被爆し、まぐる船員として再びビキニで被爆して二重の被害者となり自殺した藤井節弥さんのことが、実姉の口から痛ましく語られました。

た。どれも身にたまされるような悲痛な証言であり、涙しつづき入る方々もみられました。「一刻も早く地球上から核兵器をなくさなくてはならない、それが被災者の方々に唯一報いる道であり、私たちに課せられた責務である」と来場者一同心に誓ったことと思います。

シンポジウムには、海外の被爆者も招かれ、その中には、ビキニと同じく、アメリカのマーシャル諸島での核実験の被害者で、今なお生活を脅かされているネルソン・アンジャインさんの証言がありました。島民が困っている、医者が欲しい、食料が欲しいと訴えまじった。同じ核実験によりお互い被害者となった人々が、国境を越えて手をつなぐこととなったのです。いま私たちは、現地に支援船を送ることができないかと、広大な構想を抱いているところです。

小さなまち三浦三崎で開かれた大きな意義あるシンポジウム、核兵器廃絶運動は広範な人々を結集し、必ず目標は達成し得ることをみんなが確信した一日でした。(核兵器廃絶をめざす三浦連絡会事務局長)

新年度事業計画・予算を決定し、新役員選出

協合理事会・評議員会開く

三月二十四日、学生会館で協会の第一一〇回理事会が開かれ、一九九三年度の事業計画と予算を決定しました。年度内にビキニ事件40周年、協会設立20周年を迎える記念すべき年度にあたり、記念シンポジウムの開催など記念事業の推進が重点。事業計画では、①第五福竜丸展示館の管理・運営と発展②ビキニ事件の継承と普及③組織運営の強化の三点を柱としてそれぞれ数項目の重点課題を設定。「広島・長崎・ビキニの原点にたちかえり、第五福竜丸保存を実現させた人々の熱意と努力を想起し、核問題が人類にとって最重要な今日のテーマであることを認識し、展示館の一層の発展のために力を尽くす」としました。

また、理事会に引き続き評議員会が開かれ、次の役員を選出しました。

理事(9名) 川崎昭一郎(会長)、本多喜美(副会長)、小川岩雄、斎藤鶴子、猿橋勝子、杉重彦、田沼肇、服部学、松井康浩、監事(2名) 河崎光成、清水幹雄。